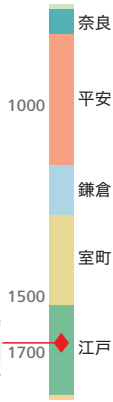
奥の細道

白河

心もとなき日数重なるままに、白河[1]の関にかかりて旅心定まりぬ。「いかで都へ」[2]と便り求めしも理なり。中にもこの関は三関[3]の一にして、風騒[4]の人、心をとどむ。秋風[5]を耳に残し、紅葉[6]を面影にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花[7]の白妙に、茨[8]の花の咲き添ひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し衣装を改めしことなど、清輔の筆にもとどめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに関の晴れ着かな　曾良[10]

松尾芭蕉



1 白河の関　。現在の福島県白河市に置かれていた古代の関所。奥羽への入り口にあたり、歌枕として有名。

2 いかで都へ　「便りあらばいかで都へ告げやらむ今日白河の関は越えぬと」（『拾遺和歌集』別・平兼盛）をふまえる。

3 三関　古代奥羽にあった三つの関所。白河・勿来・念珠。

4 風騒の人　詩文を作り楽しむ人。

5 秋風　「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」（『後拾遺和歌集』羈旅・能因）をふまえる。

6 紅葉　「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の関」（『千載和歌集』秋下・源頼政）をふまえる。

7 卯の花　「見て過ぐる人しなければ卯の花の咲ける垣根や白河の関」（『千載和歌集』夏・藤原季通）などをふまえる。

8 茨　とげのある小低木類の総称。ここは野茨で、初夏に白い花をつける。

9 古人冠を正し……　竹田大夫国行が白河の関を越えるにあたって能因の名歌に敬意を表して衣服を晴れ着に改めた、という故事が藤原清輔（一一〇八～一一七七）の歌学書『袋草紙』に載る。

10 曾良　河合曾良（一六四九～一七一〇）。この旅に同行した芭蕉の門人。